様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年４月２３日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：平成２０年度～平成２１年度
課題番号：２０７９１７９４
研究課題名（和文）統合失調症を持つ精神障害者の回復に関する研究
研究課題名（英文）The resilience in the recovery from Schizophrenia
研究代表者　冨川順子
（　　）
研究者番号：９０４３３０１０

研究成果の概要（和文）：
統合失調症を持つ当事者が捉えた病の経験とは、幻覚や妄想に圧倒されて徹底的な無力感と敗北感を味わう経験であった。
対象者が回復の過程で自ら発揮した力(resilience)としては、信頼関係を結ぶ力、人から学ぶ力、経験から学習する力、自分の認知を変えて前向きに捉えていく力、つらいことを忘れていく力、過去と同じ失敗を避けようとする力、無理しない程度に物事を継続する力が捉えられた。
対象者の回復の過程では①幻覚や妄想に圧倒され、仕事やそれまでの生活を失って徹底的な敗北感や無力感を味わう段階、②無力感のなかで無気力に流されながらも日々できるわずかなことを行って日常生活を過ごす・人や薬に頼りながら人と自分への信頼を少しずつ取り戻す段階、③無力感と小さな希望のあいだで揺れ動きながら自分の生き方を模索していく段階、④無力感を残しながらも病の意味を整理し、自分らしく生きる段階がみられ、対象者は③か④のどちらかの過程を生きていると考えられた。

研究成果の概要（英文）：
The people experienced schizophrenia as powerless, helpless condition in the hallucinations and the delusions, and they felt they were deprived everything which made their life at that time.
Their resilience which showed in their story of recovery from schizophrenia were, the power of trust other people, the power of learning from other people, the power of leaning from their own experiences, the power of change their cognitive way and get other positive way, the power to forget hardships, the power to avoid the same failures that they experienced before and to avoid too much stresses, and the power to learn how to balance to continue own safe way of living.
In their processes of recovery from schizophrenia, they experienced through,①at first they felt completely lost, overwhelmed by illness, and feel powerless and helpless, ② second, they felt powerless and suffered from apathy, and they lived their daily living, narrowly to do a little things, depending other people and medicine, ③third, they wavered and struggled between powerless feeling and hope to be able to do something, ④fourth, though they contained their powerless feeling, they found the meaning of the illness and their lives for their own, they were living their own life. People in this study were third, or fourth stage in this research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０年度	１，８００，０００	５４０，０００	２，３４０，０００
２１年度	１，３００，０００	３９０，０００	１，６９０，０００
総　計	３，１００，０００	９３０，０００	４，０３０，０００

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学、地域・老年看護学
キーワード：精神看護学

１．研究開始当初の背景

精神科医療の領域では障がい者のノーマライゼーションと医療費抑制による病床数削減の動きの中で、統合失調症を持つ精神障害者の地域生活促進がますます重要になる中で、当事者が自らの回復を促進する動きに注目が集まりつつある。

精神障がい者の回復過程は、医学的見地からみた回復の過程や、必要な医療、予後予測要因は明らかにされつつあるが、当事者からみた当事者の病気体験や、当事者が回復において自分の力をどのように発揮すればいいのかということについてはまだ明らかではない。

回復力を意味する概念として resilience があり、苦境に立たされた病者が、脆弱性を抱えながらも、困難に立ち向かい、そこから脱していく現象を捉えた概念であるが、精神障がい者の resilience に関する研究は十分にはなされていない。

従って、本研究では精神障害、統合失調症を持つ人の回復過程とその過程において発揮する力を、resilience の概念によって捉えながら、統合失調症を持つ人が捉える自らの回復の過程と回復力を明らかにすることを目的に研究を行った。

２．研究の目的

統合失調症を持つ精神障がい者を対象に、当事者の視点から、回復過程と回復する力、回復力を支えたものについて明らかにする。

３．研究の方法

統合失調症の診断後、２年以上安定して地域生活を送る、調査への同意を得た３３名（関東、関西、四国在住）に、病から回復する経験についてライフストーリ法によるインタビュー調査を行った。

得られたデータを逐語録に起こし、統合失調症を持つ人のresilience（回復力）を構成する①逆境の経験、②回復する力を促進する過程、③対象者が発揮した力という視点から、テーマを抽出し、同じ意味を持つと考えられるテーマのカテゴリー化を行った。

また対象者の回復過程を、ストーリーとして整理を行い、そのストーリーの変化の過程をカテゴリーとして表し、そのストーリーの特徴について検討した。

４．研究成果

３３名の対象者にとっての統合失調症になる経験とは、幻覚や妄想に圧倒されて徹底的な無力感と敗北感を味わう経験であることが共通していた。

２０名の対象者が回復の過程で自ら発揮した力としては、信頼関係を結ぶ力、人から学ぶ力、経験から学習する力、自分の認知を変えて前向きに捉えていく力、過去と同じ失敗を避けようとする力、つらいことを忘れていく力、無理しない程度に物事を継続する力が捉えられた。

統合失調症を持つ人の回復の過程では①幻覚や妄想に圧倒され、仕事やそれまでの生活を失って徹底的な敗北感や無力感を味わう段階、②無力感のなかで無気力に流されながらも日々できるわずかなことを行って日常生活を過ごす・人や薬に頼りながら人と自分への信頼を少しずつ取り戻す段階、③無力感と小さな希望のあいだで揺れ動きながら自分の生き方を模索していく段階、④無力感を残しながらも病の意味を整理し、自分らしく生きる段階がみられ、３３名の対象者は③か④のどちらかの過程を生きていると考えられた。

統合失調症を持つ人の resilience は、無力感とそこからさらに起こる精神症状や機能障害、そのことによって自らが感じる痛みや苦しみ、そこから逃れようがない中で、時間経過の中で人や薬の力も借りながら、その時々に自分ができる日常生活を続けたり気を紛らわせたりしながら、自分が耐えられるものになるように形を変え続けようとする不断の努力ではないかということが今年度までの研究からは示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

冨川順子(2009)：統合失調症を持つ人のresilience-概念の検討―、高知女子大学紀要、58、p.53-p.74.

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者　冨川順子
（　　）

研究者番号：９０４３３０１０

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：